

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：14302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370093

研究課題名(和文) インド音楽とペルシア音楽の交流 ヒンドゥスターニー音楽の形成過程に関する研究

研究課題名(英文) Cultural exchange between Indian and Persian music: A Study on the developing process of Hindustani music

研究代表者

田中 多佳子 (TANAKA, TAKAKO)

京都教育大学・教育学部・教授

研究者番号：70346112

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：古来、一つの伝統とみなされてきたインド古典音楽が、12世紀に北インドにムスリム政権が成立してより南北で徐々に異なる変容を辿り、今日、北のヒンドゥスターニー音楽と南のカルナータカ音楽という二つの様式に大別されるに至った。本研究では、ヒンドゥスターニー音楽の歴史的な成立過程を、従来のヒンドゥー教徒側の視点に立ったサンスクリット語・ヒンディー語文献に依拠した説明ではなく、当時北インドの公用語であったペルシア語や古ウルドゥー語の諸文献に基づき、ムスリム側の視点に立った異なる角度からとらえなおすことによって、全く新しい諸様相を浮かび上がらせた。

研究成果の概要(英文)：The ancient canonical tradition of Indian classical music has gradually been changed since the 12th century. This music has divided into two styles: the Hindustani tradition of North and the Karnatic tradition of the South. In this project, we succeeded in explaining and showing the new dimensions of the historical process of Hindustani music from the Muslim point of view. The analysis focused on the influence of Persian as an official language in the medieval era and also on old Urdu materials. This differed from the Hindus who previously used Sanskrit and Hindi materials.

研究分野：民族音楽学

キーワード：北インド音楽 ムスリム ペルシア語文献

1. 研究開始当初の背景

インドの古典音楽は今日南北 2 様式に分けて扱われる。北インドの「ヒンドゥスターニー音楽」は古来のヒンドゥー教徒の音楽に、12 世紀以降に中央アジアや西アジアからもたらされたイスラーム教徒の音楽(特にペルシア音楽)の要素が古来のインド音楽に加わることによって南インドとは異なる音楽様式として形成されてきたと説明されていた。その説明は主としてサンスクリット語音楽文献に著されたヒンドゥー教徒側の言説に基づいたものであり、総合的に解明されたとは言い難かった。ヒンドゥスターニー音楽の形成プロセスには、当然ヒンドゥーとムスリムの宗教的・政治的・文化的背景が複雑に絡み合っており、その解明には歴史的・言語的に広範囲に及ぶ研究が求められる。そのためにはムスリム支配者の公式言語であったペルシア語や古ウルドゥー語などで著されたムスリム側の言説の研究が必要であるが、それが可能な研究者も少なく、関連文献情報の収集から始める必要があった。

2. 研究の目的

12 世紀以降ムスリムの影響と共にインド音楽が変質し、特にペルシア音楽とインド音楽との混交からヒンドゥスターニー音楽の形成に至ったプロセスを、特にこれまで希薄であったムスリム側・西アジア側の視点に重点をおいて解明することを目的とした。そのために、研究対象の地域的バランスと専門分野を考慮して、南アジアの言語文化研究者で音楽にも造詣の深い北田信、ペルシア語文献を用いて南アジアの歴史研究を進める二宮文子、ペルシア音楽研究者の谷正人、南アジア音楽研究者の田中多佳子からなる共同研究チームを構成し、問題意識や情報を共有しつつも、各々の関心に応じた個別研究を進める多面的解明を目指した。

3. 研究の方法

(1)研究会の実施

メンバーは各々の関心に応じた側面からの研究を進めると共に、初年次には 3 回、2 年次と 3 年次には各 2 回、計 7 回の研究会を開催して各自の進捗状況報告と情報・意見交換を行った。

研究会内での主な研究報告は以下の通り。

北田信(2015/5/9)「パンジャブの土着的イスラーム信仰と音楽 ワーリス・シャーの物語詩『ヒールとラーンジャー』における音楽」

北田信(2015/11/22)「ウルドゥー語文献 Sarmayah-i- 'Israt に見られる音楽療法について」

谷正人(2015/5/9)「サントゥールの新しい身体性 「楽器盤面の地政学」へ向けて」

田中多佳子(2016/4/24)「データベース化作業の進捗状況について」

二宮文子(2014/6/21)「デリー・サルタナト期のスーフィー文献におけるサマーの記録：サーヴェイと傾向」各スーフィーに関わる文献(原典)からサマーにまつわる記述が抽出・紹介された。

二宮文子(2014/12/20)「南アジアのペルシア語スーフィー文献における音楽に関する記述試訳」

二宮文子(2015/11/22)「トルバテ・ジャームとアフレ・ハックについて」

二宮文子(2017/2/7)『楽園の如きヒンドゥスターンの歌い手たちの記録』内容紹介

(2)特別講演者の招聘

2 年次第 1 回の研究会では、ペルシア音楽研究の第一人者でインド音楽にも詳しい民族音楽学者柘植元一氏を招き、研究紹介とイラン現地調査に向けての助言を得た。

柘植元一「カーヌーンに関する図像学的な研究」

(3)現地調査の実施

2 年次には全員で 11 日間のイラン現地調査(テヘラン、イスファハーン、マシュハド、トルバテ・ジャーム)を行った。各地の音楽芸能実践の観察、音楽関係者や楽器職人らへの取材、博物館や文化的・宗教的施設等の視察、文献・音源資料の収集などを行った。3 年次には谷と田中で 12 日間のインド現地調査(デリー、ムンバイ、プネー)を行った。当初、カシュミール地域での現地調査を予定していたが、政治情勢等から自粛せざるを得ず、ムンバイやデリーなどの大都市で楽器サントゥールに焦点化した調査を行った。結果的には、代表的な演奏家や主たる楽器職人らへのインタビューや演奏指導を受けることが叶い、予想を超える成果を得ることができた。

(4)研究助言

研究対象および方法論に重なるの多い井上春緒氏との情報交換を頻繁に行うとともに情報提供を受けた。

井上春緒(2015/11/22)情報提供「スーフィアーナ・ムスィーキーの現在：カシュミールのフィールド・ワーク 2015 から」

井上春緒(2017/2/7)博士論文報告「ヒンドゥスターニー音楽の成立 - ペルシア語音楽書からみる北インド音楽文化の変容 - 」

(5)データベースの利用

収集した貴重な文献資料についてはデータベース化してメンバー全員で共有した。様々な言語にまたがる音楽関連用語についてはデータベースも作成し、主に田中がその一部情報の分析に基づいて研究を行った。

(6)成果の公開：最終年次は、研究会を開催せず、メール会議によって情報交換を行いながらもあえて集約することはせず、各自の成果を、個別あるいは共同で口頭発表や論文執筆の形で多面的に公表した。

4. 研究成果

(1)北田は、インドで書かれた古ウルドゥー語やペルシア語の文芸書や一般書に見られる音楽記述に注目し、これまで描かれて来なかったムスリム世界の日常生活における音楽観やあり様などを読み解いた。

(2)二宮は、ペルシア語によるスーフィー関連文献やムガル朝の史書における音楽への言及を探り、古典音楽に影響を与えたと見られる宮廷文化や軍楽、宗教音楽などの具体的状況を読み解いた。

(3)ペルシア古典音楽の楽器サントゥールの演奏家でもある谷は、その影響を強く受けたインドの楽器サントゥールの奏法と構造に着目し、実践的習得にも努めながら、比較研究を進めた。

(4)田中は全体の統括者として、メンバーから収集・報告された資料や情報をデータベース化して共有をはかった。個人研究としては、諸文献から旋法名(ラーガやマカーム)を抽出したデータベースを作成し、旋法概念の時代的・地域的変遷や影響関係を分析した。

(5)全体として、これまで見過ごされてきたムスリム側の諸文献や音楽以外の文献には、音楽文化に関わる新たな記述や情報が豊富に含まれていることが明らかとなった。北インド音楽形成のプロセスを考える際には、従来のヒンドゥー側の言説のみによるのは片手落ちであって、本研究で扱ったようなムスリム側の言説を補完することによって、初めて北インドという空間で共に暮らしてきたヒンドゥー・ムスリム両者の影響関係や音楽世界の実態をより総合的にリアルにとらえることが可能となることが解明された。

(6)本研究はあくまで端緒にすぎず、こういった視点に立てば、これまで顧みられることのなかった情報源は無尽蔵にある。今後こうした研究が注目され、より多くの研究者に多面的に解明され続けてゆくことが望まれる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

二宮文子、「『アーイーニ・アクバリー』に見られるムガル宮廷での音楽」『南アジア研究』第29号、南アジア学会、査読有(投稿中)

北田信、「ウルドゥー語教育と南アジア伝統音楽」、『外国語教育のフロンティア1』大阪大学大学院言語文化研究科、2018、pp. 237-245、査読無

Makoto Kitada, “Music Therapy Mentioned in the Sarmāyah-i ‘Īsrat, an Urdu Treatise on Sitar Playing”, *Traditional South Asian Medicine Vol. 9*, Reichert, Wiesbaden, 2017, pp. 120-135. 査読無

北田信、「感覚のカクテル、ダカニー・ウルドゥー語詩における比喩」今松泰・澤井一彰編『前近代南アジアにおけるイスラームの諸相、在来社会との接触・変容』、2015、pp. 23-32、査読無

北田信、「ジャガッジュヨーティル・マツラ作、戯曲『マダーラヴー浩の誘惑』(後半)」『印度民俗研究』14、2015、pp. 45-84、査読無

北田信、「ワーリス・シャーの愛とエロス—パンジャブ語のスーフィー文学『ヒール』」『西南アジア研究』No.83、2015、pp.1-19、査読有

〔学会発表〕(計5件)

北田信(2018/3/8 & 3/13) 招聘講演
“Gastronomy and Hierogamy in Deccan: Nuṣratī, the poet of Dakanī Urdu”&“Musique, poésie et peinture: Les peintures de Rāga-mālā”, フランス国立東洋言語文化研究所 (INALCO, Institut national des langues et civilisations orientales)

田中多佳子(2018/2/3)

「北インドにおける主要ラーガ名の変遷：17～20世紀の諸文献の分析から」2017年度第8回 FINDAS・水野善文代表科研「南アジア多言語社会における複合文化のなかの文学伝承」共催研究会

北田信(2017/12/6)

「デカンの美食：ダカニー・ウルドゥー語の詩人ヌスラティー」南アジア研究会(関西)

田中多佳子・二宮文子・井上春緒

(2017/11/12)

共同発表「北インド古典音楽の形成過程におけるペルシア音楽の影響に関する共同研究」東洋音楽学会第68回大会

田中多佳子「16～20世紀の諸文献にみるラーガ名の比較分析」

二宮文子「13～17世紀北インドのペルシア語史料に見られる音楽実践」

井上春緒「ヒンドゥスターニー音楽のリズム理論 と奏法におけるペルシャの影響 —18 世紀のカシミールの音楽書を事例として」]

谷正人(2017/4/1)

「指から音楽を理解すること—サントゥールとセタールの比較から」国立民族学博物館 野澤豊—代表プロジェクト研究会
「音楽する身体間の相互作用を捉える —ミュージッキングの学際的研究」

6. 研究組織

(1)研究代表者

田中 多佳子 (TANAKA, Takako)
京都教育大学・教育学部・教授
研究者番号：70346112

(2)研究分担者

北田 信 (KITADA, Makoto)
大阪大学・言語文化研究科・准教授
研究者番号：60508513

谷 正人 (TANI, Masato)
神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授
研究者番号：20449622

二宮 文子 (NINOMIYA, Ayako)
青山学院大学・文学部・准教授
研究者番号：40571550

(3)研究協力者

井上春緒 (INOUE, Haruo)
京都大学・人文科学研究所・研究員
研究者番号：80814376